

稲作

「北海道 稲作に挑戦する人々」その2

勇払郡厚真町 種部 健一 氏

1. はじめに

数年に一度は冷害に襲われる稲作地帯にも係わらず、収量・品質の向上・安定を目指し、たゆまぬ努力を重ねるとともに、地域の後継者育成にも尽力され、成果を上げてきた経営者がいる。今回は、勇払郡厚真町（胆振総合振興局管内）の種部健一氏（写真1）にお話を伺った。

2. 地域の特徴および経営概要

(1) 地勢・立地条件

勇払郡厚真町は胆振総合振興局管内の東部に位置し、東はむかわ町、西は苫小牧市・安平町、北は由仁町、南は太平洋太平洋に面した南北に長い町である。国道や鉄道は海岸線に沿って町の南端を横断している。

気候は太平洋側気候で、夏季の日照は少なく、冬季は積雪が少なく日照が多いのが特徴

である。日本海側気候の岩見沢市と比較すると、最多月降水日数は12月の20.1日に対し7月の11.2日、最少月降水日数は6月の8.0日に対し2月の7.1日、年降雪深は753cmに対し138cmとおよそ60km程度の距離だが大きな差がある（図1）。

耕地面積は約5,700haで、販売農家戸数は410戸である。耕種部門では稲作を中心に麦・大小豆、ばれいしょ、てん菜、花き・野菜類が主な作物である。そのうち、稲作は胆振総合振興局管内の水稲の作付約3,500haのうち、1,600ha（44%）を占める管内最大の作付面積となっている。

農業生産額は約11,450百万円のうち農産部門7,320百万円、米は3,190百万円と全体の約28%を占める。また、特産品として有名な「ハスカップ」は日本一の作付面積となっている。

3. 稲作の経歴と経営概要

(1) 稲作の経歴

厚真町豊丘は明治25年に稲作が始まり、町内では赤毛を初めて試作した地域であり、水田発祥の記念碑が建てられている（写真2）。種部家は祖父徳蔵氏が大正4年に富山県から



写真1 種部健一氏

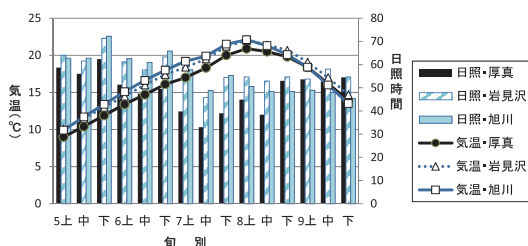


図1 厚真町の5～9月の気象

(岩見沢市、旭川市との比較)



写真2 水田発祥の地の記念碑

(厚真町豊丘、昭和51年9月建立)

渡道、大正15年に小作として現在地に入地し、その後、昭和16年に念願の自作農となった。当時は水田1.3ha、畑0.7ha、山林4haであった。昭和21年父富雄氏が復員し、就農した。戦後は、水田の客土、暗渠施工等の土地改良を行い、昭和30年代には畑の開墾で面積を拡大した。

種部健一氏は入植3代目で、昭和41年に農業高校を卒業して就農した。昭和45年から基盤整備に伴い水田の区画整理が始まったものの、46年の失火により家屋以外を焼失した。自力の施設再建等により再出発し、また、近隣からの移譲により水田は9.3haとなり、40年代半ばから始めた養豚との複合経営に取り組んだ。

昭和63年に開始された豊丘地区国営農地開発事業により山林22haを譲り受けるとともに、所有山林5haを開畑したものの、排水不良で作付困難であったため、その後、透排水性の改善を重ねて平成6年より全面積作付可能となった。平成17年に田畑、山林を、24年には水田を譲り受け、借地など約7haの面積拡大を果たした。また、平成18年からは水田基盤整備および換地による離れ地の解消を図ってきた。当地域は水田に好適な土壌条件ではないため、稲作の経歴は土地改良の歴史そのものであった。

(2) 経営概要

現在の経営規模は田畑合計42haで、うち、水田は14.4haで9.8haが水稻作付、残りは転作田である。豆類、小麦、甜菜、馬鈴薯の輪作による畑作経営と、平成18年までは養豚も入れた複合経営である。さらに10年目を迎えた農地受託集団みらいファームの構成員として共同農場にも参画し、共同利用の水田3.8haも作付している。また、20年にわたる苫小牧消費者協会との特別栽培米の契約栽培や、食農教育として幼稚園などの農業体験（芋掘り）の受け入れを継続している。

4. 稲作技術の特徴

全てにわたり、基本技術を忠実に守り、稲作を続けてきた。

(1) 透排水性の改善

土壌は下層土も含めて樽前山の噴火に由来する火山灰で、国の事業を利用した基盤整備により粘土を客土して水田の土壌改良を行うとともに、サブソイラーを入れた心土破碎により乾田化を図ってきた。透排水性改善は、種部家の歴史とともに実施されてきた圃場作りの基本であり、今日の経営を支えている。

(2) 施肥等

積雪の極めて少ない地域であり、融雪材は不要であるものの、ケイ酸散布を実施している。本田施肥では、地域の施肥標準を守るとともに、側条50%、全層50%の施肥割合で初期生育を促進している。

(3) 作付品種

平成28年の作付品種は、「ななつぼし」6.0ha、「ゆめぴりか」3.8haである。平成27年までは、特別栽培米の「ほしのゆめ」も作付け



写真3 樽前山を望む春先の圃場



写真4 苗箱の準備



写真5 種子の催芽

したが、契約終了やコンタミ防止等を勘案して、本年からは2品種とした。冷害常襲地帯として、常に冷害対策を念頭に営農しており、特に「ゆめぴりか」は深水管理を確実に実施している。

(4) 育苗と移植

初期生育の確保が難しい地域であるが、中苗マット苗による健苗育成（ずんぐり苗、老化苗対策等）を着実にを行い、適期移植に努めている。また、3回の育苗時追肥の代わりに被覆肥料（エコロング）を導入して、省力化を図っている。

(5) 水管理等

本田には沢水を利用しているが、地域全体における水資源が潤沢ではないため、適切な時期に移植ができないこともある。建設中のダムの竣工により、平成31年以降はダムからの給水が見込まれる。また、畦畔は火山性土が多く脆いため、こまめな補修を実施することや、良好な登熟条件となるよう確実な水分補給を行うなど、ムダな水を使わないことを念頭に、適正な水管理に努めている。

(6) 病虫害防除

3戸でピークルを用いた共同防除を行っているが、発生対応型防除を基本にしている。防除の要否は自身の圃場観察や予察のほか、JAや普及センターからの情報を総合的に判断するとともに、対象病虫害に合わせて適切な防除を実施している。除草剤や殺虫殺菌剤も雑草や病虫害の発生状況に合わせた最適なものを選択し、防除回数の低減を図っている。

表1 平成27年産米の出荷数量と低タンパク米数量

品 種 名	製品数量 (俵)	低タンパク米数量 (俵)	(%)
ななつぼし	341.0	341.0	100
ゆめぴりか*	245.7	245.7	100
ほしのゆめ*	169.9	169.9	100
合 計	756.6	756.6	100

*：飯米、飼料米、政府備蓄米、加工米等を除く。



写真6 登熟期の水稻

(7) 高品質米生産、その他

収穫は試し刈りによる適期刈取り判定を基本に実施し、品質の高位安定化を図っている。低タンパク米（精米蛋白質含有率6.8%以下）生産を目的とした稲作ではないものの、産米の品質レベルは極めて高く、平成27年産米は全量低タンパク米で（表1）、平成26年産米もほぼ全量低タンパク米であった。

5. 今後の課題

近年は、汎用コンバイン、トラクター等の大型機械を導入して土地利用型農業の確立を目指すことと、消費者の求める安全良質な農産物生産を目的とした有機無農薬栽培、特別栽培米の取組等に力を入れた経営を目指している。

平成23年より長女の夫も経営に加わったものの、町外のため、担い手問題が種部家における懸案事項でもある。また、地域活性化のためにも地域の後継者育成は、継続した課題である。

6. おわりに

種部氏は指導農業者で、町の新農業者育成協議会会長および農業振興計画委員会の委員長を勤め、特に後継者育成に尽力している。農業実習者の受け入れは平成7年から始め、農業改良普及員、新規就農者、大学生等を受け入れ、なかでも新規就農希望の研修生のうち4名が当地域において就農した。

地域に担い手を育てる気風があるが、その中心で担い手を育成しており、種部氏抜きには、地域の担い手育成は語れないようだ。このように、高品質、低タンパク米生産の牽引と併せて、担い手育成でも地域への貢献が極めて大きい。

7. 農業改良普及センターの意見

初期生育不足、夏場の日照が少なく、小出来なイネでもいもち病が出るような当地域の条件だからこそ、基本技術を忠実に守ってきたと考えられる。

北海道における胆振の米は、冷害の常襲地帯として収量や品質の変動の大きさから、厳しい評価があったものと推察され、空知や上川の陰に隠れてしまいがちである。しかし、近年、収量や品質の変動をできる限り小さくすることにより、道内有数の良質米産地へと変貌を遂げつつあるが(図2・図3)、種部氏の事例はそれを何よりも雄弁に語っている。今後は良質米産地としてのこれらの取り組みが地域へ波及することに加え、特別栽培米生産等を取り入れ「キラッとひかる産地」とし

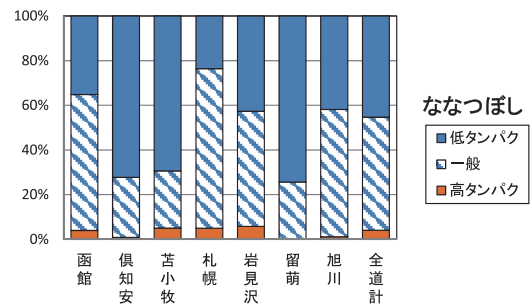


図2 平成27年産「ななつぼし」のタンパク別入庫比率

(ホクレン集荷分、平成28年6月1日現在)

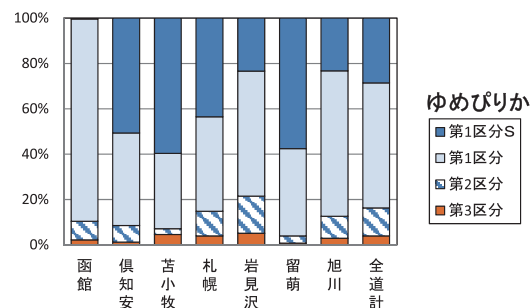


図3 平成27年産「ゆめぴりか」のタンパク別入庫比率

(ホクレン集荷分、平成28年6月1日現在)

てさらなる評価向上に期待したい。

種部氏のコメント

ごくあたり前のこととして、基本的なことを行ってきたに過ぎず、特に自慢できる技術や変わった技術は何も行っていない。無理をしない稲作や畑作が、環境にも、圃場にも、生産物にも、経営にも、そして人(家族)にも優しいのではないか。今後も、健康が許す限り生産活動、後継者育成に努力したい。

(文責 一般社団法人 北海道米麦改良協会 技監 相川 宗厳)